

精神の厠の増築

厠は安らぎの場だ。薄明かりの中、心が静まる不思議な体験がある。この厠的な体験は、単なる生理的必要性を超えた、精神的な意味を持つ。

街を歩いていると、実際に用を足していなくても、厠的体験に出会うときがある。喧騒から脇道へ一步入った静けさやビル群に佇む小さな公園など、あの瞬間、私たちの精神は「用を足している」のではないだろうか。街には、そんな「精神の厠」と呼べる場所が点在している。

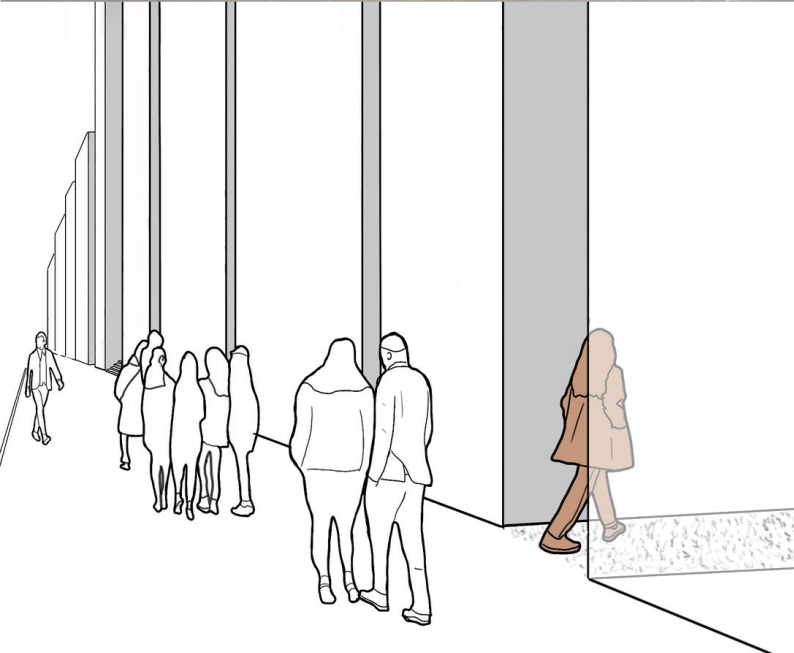
これは日本の伝統的な空間意識にも通じる。内と外、公と私の境界にある「間」の空間を重んじる考え方だ。玄関や縁側が典型例だが、都市の隙間にある静寂な空間もまた、この伝統を現代に引き継ぐものと言える。

私たちの計画では、こうした都市の片隅に息づく「厠的体験」をより強め、増築するものだ。

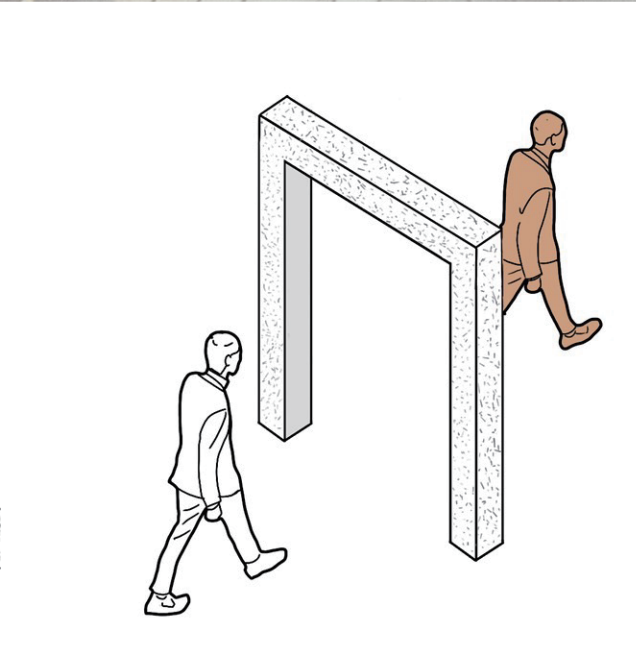


孤独、嫉妬、羞恥、疑い

都市の厠的体験は、身体感覚（視覚・聴覚など）が繋がったまま、一部が切り離されたり転換したりした時に現れると考えた。



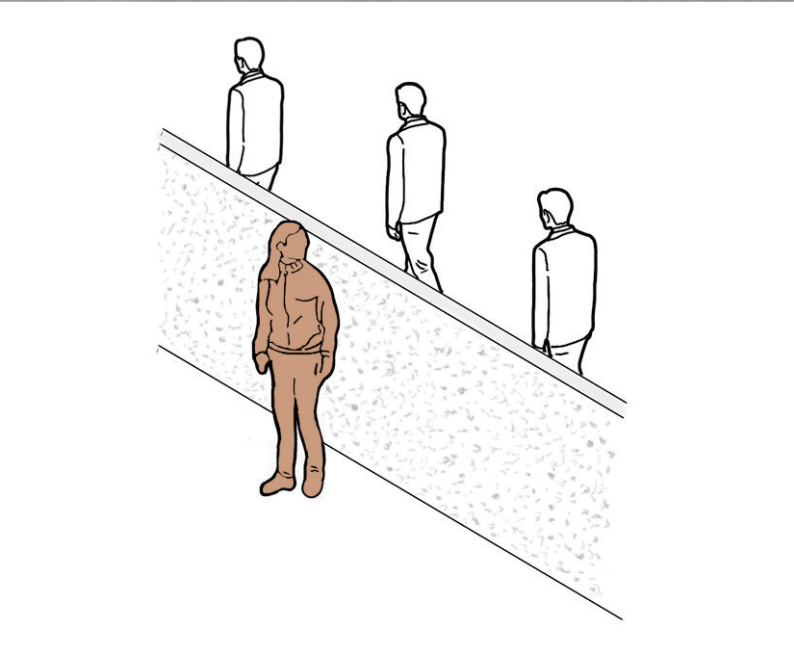
大通りから路地に入る
うす暗く狭くなる、喧騒も小さくなる



門や鳥居をくぐる
ある種の記号として領域の転換を認識する



通りから歩道橋を上る
塀の高さぶん視界が遮られ、身体も通りから離れていく



塀や壁の外側から内側に入る
視界や身体は外側から遮られる、音は聞こえる